10 複 式 教 育

羽場邦子・佐藤　健・西井章司

1　研究テーマと複式教育について

複式教育の実践研究は，単にその学校の教育に留まらず，単式学級のみで構成される大規模校においても，これからの教育の在り方を探る１つの方向を示すものと考えられる。

本校では，「個が生きる授業」「個が生きる授業の評価」「豊かな感性を育む」と一連の研究テーマを通して，複式学級の「よさ」を生かしていく教育の研究を進めてきた。その中で複式教育のめざす子ども像として常に追い求めてきたものが，「自立」である。これまでの研究成果をふまえ，研究主題を「自立に向かう子どもたち」，一昨年度から副題を「人やものとかかわることを大切にして」として，実践，研究を進めている。

2　複式教育を通して育みたい自立の姿

ここでは，複式少人数学級の特性を「よさ」として生かしながら，その中で育みたい児童の自立の姿を考えてみたい。

(1)　自ら学ぶ

複式学級の間接指導においては，低学年の段階から児童が自ら学習を進めていく力の育成が必要とされる。この考え方をさらに進めて，両学年の児童が，同時に，自分たちの力で授業を進めていく姿を見守るという「見守り型」支援（次節で詳しく述べる）を授業に積極的に取り入れ，さらに主体的に学ぶ児童の育成を図っていきたい。

(2)　異学年のかかわりを重視する

異学年相互のかかわりの中で，上学年の児童は下学年の児童との触れ合いから，これまでの自分の姿を重ねながら思いやりをもって接するようになる。また，その活動の中で自分の成長に気付くこともできる。下学年の児童は，自分たちの活動には上学年の児童の支えがあることに気付き，喜びを感じると共に自らも学ぼうとする。さらにこれからの自分の姿を描くこともできる。このように，異学年のかかわりの中で，互いに支え合い，高まり合い，自立に向かっていくことが期待できる。

(3)　自信をもって自己表現する

複式学級は少人数であるので，一人一人がじっくり互いの表現を見聞きすることができる。また，全員に発表の機会があり，自分なりの表現を十分に行うことができる。児童が自分たちで学習を進める場は相互に表現し合う場でもあり，自力で表現方法を学びとっていく場でもある。本校では，複式学級のよさを生かした指導や支援を行うことで，どのような場面や集団の中にあっても，自信をもって自己表現する児童に育てたい。

3　子どもたちの「自立」をめざして

(1)　複式の特色（よさ）を「自立」に生かす授業づくり

①　「見守り型」支援の充実

複式の授業では，これまで多くの場合，教師が学年の間を移動する「わたり」が行われるものとされ，間接指導の中で子どもたちがいかに主体的に学習できるようになるかという方向で研究がなされてきた。この考え方をさらに深め，本校では，教師が，両学年の児童が自分たちの力で主体的に学習を進めるのを同時に見守りながら支援をしていく授業形態を構想していくことにした。これを「見守り型」支援と呼んでいる。この支援では，教師は，個や集団の状況を見取りながら，柔軟かつ臨機応変に対応することが

できる。そのための支援の工夫は次の点が挙げられる。

・学習の進め方の明確化 ・日直司会による進行の場の設定 ・問題解決の場における活動の観点や自己評価規準の提示 ・教室環境の整備

② 学びを共有する場の設定

複式学級の最大の特色（よさ）は，異学年の児童が常に同じ教室内にいるということである。このことを学習づくりに生かしてこそ，複式のよさを生かした学習といえるのではなかろうか。異単元異内容指導による教科においても，１時間の授業の導入や展開の部分で，共通の学習の場を設定する単元もある。児童はそれぞれの異学年児童の気付きや考え方にも触れながら，単一の学年で学習するよりも豊かな学習となることが期待できる。

また，社会科・理科においては，同単元同内容異程度の学習を取り入れている。異単元異内容指導においては設定しにくい学びを共有する場が確実に設定でき，異程度の学習をすることで学年の発達段階に応じた目標も達成できると考えたからである。学びを共有する場を設定することで，少人数学級においても多様な考えに触れる場を保障でき，異学年児童が互いに学び合い，自らを高めていこうとする態度を育成することができると考えている。さらに，下学年でも上学年でも同じ単元を学習することにより，学習の定着と深まりや下学年に受け継がれていく活動も可能になる。学びの共有の場を確実にもつことができる指導として，こうした単元の開発もしていきたい。

③ 下学年に受け継がれていく活動

生活科等で，２年間の継続した単元を複式学級の特性を生かして計画するとさらに豊かな活動が期待できる。また，Ａ・Ｂ年度方式の学習では，年間計画上では，２年間を１サイクルとして学習が完結するが，実際には，学級の歴史となって構成児童は変化しても受け継がれて行く場合が見られる。これは，前年度の１年生の児童が，体験の記憶をもった２年生として学級に残り，次に伝えていく複式学級ならではのよさである。この学級の「小さな伝統」のよさに着目して，子どもたち自身の力で，次の下学年に受け継がれて行くような活動内容を考えていきたい。

⑵ 児童の手で企画・運営する活動

① 複式集会（複式学級低・中・高学年の交流）

複式運営委員の児童が中心となって企画し，楽しく交流しながらよりよい人間関係を培っていくための場として，「たんぽぽ集会」（一年生を迎える会，いもパーティー，６年生を送る会）などの集会活動を年間計画に位置づけている。毎年行われるこれらの行事を通して，経験を生かして行事を企画したり，次の年に向けて興味や意欲を喚起したりして，見通しをもって活動できる子どもたちを育てていきたい。

② 帝釈小交流（他校との交流）

本校では，これまで本校とつながりのある比婆郡東城町立帝釈小学校と交流学習を行ってきた。本校児童にとっての帝釈の豊かな自然の中での活動や，帝釈小学校の児童にとっての広島市街地での活動や本校児童との交流は共に貴重な体験である。今後も児童が自ら企画し，運営しながら交流学習を進めていくことができるように，両校の教師が連携をとりながら支援していきたい。

4　成果と課題

(1)　複式の特色（よさ）を「自立」に生かす授業づくり

①　「見守り型」支援の充実

◎子どもたち自身が学習を進めることが当たり前になることで，「待たされている」「することがない」といった受け身の姿勢から，次に何をするのかを子どもたち自身で考える姿（一人ひとりが学び方を学ぶ姿）が見られるようになってきている。

◎☆学習の進め方を子どもたち一人ひとりが確実に身につけることができるような「学習ガイド」の作成を行ってきた。低学年では，板書と対応したワークシートを中心に進めている。また，中学年では，指示・発問等を明示したカードを活用した。高学年では，これまでの積み重ねから，学習が子どもたちの手で成立するように見守っている。

☆学習の進め方について具体的にふりかえりができるような観点を設定していく。

②　学びを共有する場の設定

◎異単元異内容を基本とする国語や算数では，学習の導入やまとめなどで，意図的に互いの学習を交流する場を設けることで，広く豊かな学習を行うことができた。

◎中学年社会科では，同単元同内容異程度の学習を展開した。常に異学年がペアを組んで学習することで，互いの気づきのよさや発想のおもしろさを共有することができた。

③　下学年に受け継がれていく活動

◎２年間を１サイクルとして考えることは，子どもにとって学習のチャンスが２倍に増えることにつながる。また，前年度の学習を想起したり，次年度の学習に見通しをもったりすることにつながっている。

(2)　児童の手で企画・運営する活動

①　複式集会（複式学級低・中・高学年の交流）

◎子どもたちに企画・運営を任せることで，自分たちで企画・運営する方法を学ぶ機会となっている。また，主催学級の中で，小さな伝統として引き継がれている。

◎複式学級創立30周年の節目となった本年度は，これまで以上に保護者を招待するようにした。児童・保護者・担任の連携を一層図ることができた。

☆毎年行わなければならない活動としてとらえるのではなく，子どもたちの思いや願いが実現できる活動を柔軟に考えるようにしていく。

②　帝釈交流（他校との交流）

◎本年度は，帝釈小学校の希望に沿って，全校でのお迎え会，単式学級での交流授業をもつことができた。全校行事として位置づけることで，交流を深めることができた。

◎宿泊を異学年集団で経験することで，上学年には指導力を下学年には生活の力を身につけるよい機会となっている。

◎☆毎年継続して交流を行うことで，友達や自然とのかかわりを深めることができるようになっている。行事のみの交流で終わることのないような日常的な交流の場を模索していきたい。

(3)　その他

☆「聞くこと」「話すこと」は，かかわりの基本である。低・中・高学年へと，継続して指導を積み重ねていく必要がある。

☆交流給食・複式縦割り遊びなど，複式学級の縦のつながりを日々の生活の中でより一層充実させていきたい。

◎＝成果　　☆＝課題